

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Ecological Anthropology of Sea-mammal Hunting among the Chukchi in Northeastern Siberia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008546

Ecological Anthropology of Sea-mammal Hunting among the Chukchi in Northeastern Siberia

Kazunobu IKEYA
National Museum of Ethnology

シベリア北東部におけるチュクチの海獣狩猟の生態人類学

池谷 和信
国立民族学博物館

The Chukchi are an indigenous people of the Chukot Peninsula in the northeastern part of Russia. The population of the Chukchi in 1989 was about 15,000. In the latter half of the nineteenth century, the Chukchi were divided by ethnographers into two groups, one group tending herds of reindeer and the other group living along the coast and depending on hunting sea mammals for their subsistence. However, due to the spread of socialism in the Soviet era, many of Chukchi work on state-run farms.

Cultural anthropologists have conducted some studies in recent years to examine changes in sea-mammal hunting in Russia following the collapse of the Soviet Union (Kerttula 2000). That particular study by Kerttula presented some information of sea-mammal hunting related to the ethnography at Sireniki village in the Russian Federation's Chukotka Autonomous Okrug. This report is intended to describe and present analyses of the current practice of sea-mammal hunting among the Chukchi. It presents the socioeconomic roles in the settlement from an ecological anthropology perspective. This report is based on a survey conducted by the author at Lorino Village, located in the Chukotsky District of the Chukotka Autonomous Okrug.

The Lorino village is located along the Bering Strait; it lies within the territory of a vast inland tundra. According to data for 2004, villagers are engaged in sea-mammal hunting, reindeer herding, handicraft production, fur factories, etc. Sea-mammal hunters are 32 among 175 people belonging to the municipal unified enterprise of agricultural workers. They have hunted various sea mammals: gray whales, bowhead whales, walruses, bearded seals, ringed seals, etc. They have one hunting camp aside from the main fishing village. In recent years, new hunting organizations have emerged and have begun hunting sea mammals in that area. This report describes and clarifies hunting activities and the conflict between municipal enterprises and new organizations.

Key Words: Sea-mammal Hunting, Gray Whale, Hunting Camp, Chukchi, Ecological Anthropology

キーワード：海獣狩猟、コククジラ、狩猟キャンプ、チュクチ、生態人類学

1 はじめに

(1) 先行研究、目的、方法

ベーリング海は、世界でもっとも海獣資源の豊かな地域といわれている。北極海での氷の溶解とともに、クジラ、セイウチ、アザラシなどが季節的に回遊する。人類は、海獣類の移動路や繁殖地などを見つけ、それらに依存するのに便利な海岸部に居住してきた。この研究では、ベーリング海峡の西側に暮らすチュクチの村を対象にして、現代における彼らの海獣狩猟の実態をとくにクジラ狩猟に注目して生態人類学の視点から把握することを目的とする。また、クジラの捕獲制限頭数をめぐる政治と地域社会とのかかわりについて考察する。

チュクチは、主なる生業の違いによって伝統的に「トナカイチュクチ」と「海岸チュクチ」とに二分されてきた。筆者は、1997年以来現在まで主として、チュクチのトナカイ飼育の生態や歴史などを対象にした文化人類学的研究をしてきた(池谷 2002; Ikeya ed. 2003; Ikeya 2005)。そこではチュクチが遊牧民としての伝統を維持しつつも社会主義という国家政策に翻弄されてきた姿がみられた。しかし、チュクチ文化を把握する際にトナカイ飼育のみでは十分ではない。もうひとつのチュクチの実像である伝統的に海獣狩猟に従事してきた人々の暮らしを把握することなしにチュクチ文化の全体を理解することはできない。

さて、チュクチの海獣狩猟を対象にして現地調査に基づく文化人類学的研究は多くはない。近年、ソビエト崩壊後のチュクチの海獣狩猟について言及した研究が見られる程度にすぎない (Kerttula 2000)。ここでは、チュコト自治管区のシレニキ村の事例を対象にしているが、チュクチの海獣狩猟を対象にした生態人類学的研究はまだ生まれていない。またチュクチの海獣狩猟について、既存の文献を引用する形で紹介しているものはみられる (秋道1994、浜口2003、大隈2002)。しかし、チュコトカでの現地調査に基づく研究報告は生まれていない。

そこで、この研究の目的は、チュクチの海獣狩猟の実態を詳細に記述し、集落における海獣狩猟の社会経済的役割について考察することを目的とする。具体的な課題は、以下の3点である。第一に、チュコトカの海獣狩猟の全体を概観する。第二に、調査村におけるクジラ狩猟の実態を詳細に記述する。最後に、村におけるクジラ狩猟の意義や国営と私営という2つの事業体の役割を考察する。

研究方法としては、つぎの2つの方法がとられた。①2005年9月、チュコト自治管区の中核地であるアナーデルの農業局にて、チュコトカ全体の海獣狩猟にかかわるあらゆる統計データの収集をした。同時に、筆者の調査地においてセイウチなどの肉の缶詰生産計画に深く関与しているNGOレッドクロス・チュコトカ支部などに聞き取り調査をした。

②2003年8月、2004年9月、ロリノ村にて現地調査をおこなった。村から約10km離れた(船外付きボートで所要約30分)狩猟キャンプであるアッカニに滞在した。このキャンプ地は、ロリノ村の人びとの一部が現在の村に移住する以前にかつて長い間居住していた場所である。この場所の近くはセイウチの回遊路になっていて、セイウチの繁殖地も遠くはない所である。なお、本稿でのハンターの実像は、狩猟採集民のハンターとは大きく異なるので「ハンター」としておく。

(2) 調査地の概観

筆者の調査地であるロリノ村は、チュコト自治管区チュコトスキー区に位置する。この村は人口総数1419人(2003.6.1現在、このうち1288人が先住民)のうちチュクチが大部分を占め、その他はエスキモーやロシア人などから構成される。この村ではチュクチやエスキモーはもともと分散して住んでいたものの、1970年以降の国家による集住化政策によってロリノ村に移住してきた人々が多い。この村の歴史を簡単に紹介する。

まず、1924年のロリノに、17のヤランガ(チュクチの伝統的家屋)と2つのヨーロッパ風の家があった。1926年には、ロリノ、アッカニ、ヌニアモなどあわせておよそ60世帯があり、約300人が29の毛皮製ボート、75のライフルを保持していた。ちなみにロリノの人口は52人を示す。そして、1939年にはロリノに最初の小学校がつけられ、1949年にはそこに19のヤランガがあった。戦後の1949年にはコルホーズが、1953年には火力発電所がつく

られた。その結果、1965年には村の家々でセントラルヒーティング方式がとられた。さらに、1970年にはアッカニの人びとが1978年にはヌニアモの人々がロリノに移住してきた。

図1は、調査集落内の概観を示す。集落の北西部に当たる海峡沿いの砂地に船着き場があり、ベーリング海峡に面する集落は、海岸段丘の上にほとんどの建造物が広がる。この段丘上には、国家によって建設された2階建てか平屋の住宅が並んでいる。このなかには、火力発電所、国営企業「ケペル」の事務所や毛皮加工場、幼稚園、小学校、病院などがある。また、集落の北部には村の重要な現金収入源になるギンギツネの飼育場が立地している。さらに、集落内では自由にうろつく犬が多数いる一方で、しっかりとつながれた14の犬の群れを確認することができる。

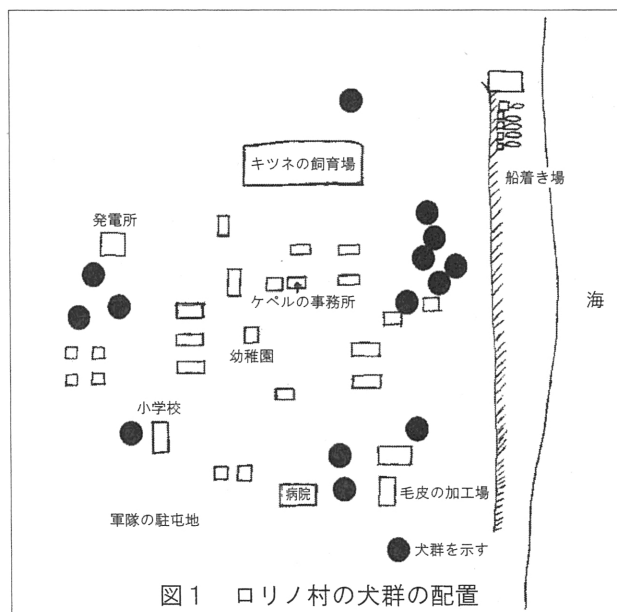


図1 ロリノ村の犬群の配置

2 チュコトカの海獣狩猟

(1) チュコトカの海獣狩猟の全体

まず、チュコトカでは、コククジラ、ホッキョククジラ、セイウチ、フィリアザラシ、アゴヒゲアザラシ、ゴマフアザラシなどが捕獲されている。このなかでチュクチのクジラ狩猟の地域的特性をみてみよう。まず環太平洋を中心とした世界のクジラ狩猟のなかでチュクチのクジラ狩猟は、極北を中心にみられる原住民生存捕鯨 (Aboriginal sustenance whaling) の一つとして位置づくものであり、コククジラとホッキョククジラを対象にしている。ちなみに、対岸のアラスカに暮らすイヌイットは、ホッキョククジラのみである。コククジラは、チュクチ以外ではアメリカ西海岸のマカインディアンによって捕獲されていたのみである。

さて、チュコトカにおける海獣狩猟に従事する村は、チュコト半島を中心として北は北極海の沿岸からコリマ川の村まで、南はベーリング海沿岸のハデルカにまで広がっている。多くの村は海岸部に位置するが、アナー

ディル川の中流域にも村が立地しており、そこではアザラシが捕獲されていることがわかる。また、これらの集落別の捕獲頭数をみると、チュコトカのなかで大きな地域性がみられる。そしてクジラ狩猟は、チュコト半島の東部の海岸部を中心に広くみられるが、調査対象地であるロリノ村の年間捕獲頭数が最も多くなっている。さらにセイウチも同様の傾向がある。しかし、ゴマフアザラシは、ロリノなどはゼロであり、チュコトカ西部の北極海に面するレトクーチなどで捕獲されている。

(2) 調査地における海獣類の種類と生態

海棲哺乳類は、鯨類と海牛類（ジュゴンやマナティなど）と鯨脚類（アシカ、セイウチ、アザラシ）に分かれる。このうち鯨類は80種あり、ハクジラ類とひげ板のあるヒゲクジラ類に分かれ、後者にコククジラが含まれる。それは、体長13~14m、重さ30tに達し7000~8000kmに及ぶ長い回遊をすることで知られる。その推定個体数は22000~23000頭を示し、1994年に絶滅危惧種からはずされている。

コククジラは、海面に出て呼吸する。クジラが吐き出す息は噴気（ふんきblowhole）と呼ばれ、長くクジラの体内にあって暖められた空気は、冷たい空気に触れて霧になって、太陽の輝きを映し出す。海上でクジラを探すものにとって噴気はその存在を知る最初の手がかりである。その形で遠方からその種を特定できる。コククジラの噴気は、左右2つの噴気孔から噴きあがる噴気、前後方面からみると、丸みをおびたハート形をしている。

調査地にみられる海獣類の種類を示す。クジラでは、コククジラ(Gray Whale *Eschrichtius robustus*)、ホッキョククジラ(Bowhead Whale *Balaena mysticetus*)、ミンククジラ(Minke Whale *Balaenoptera acytorostrata*)、シロイルカ (*Beluga Delphinapterus leucas*) などが生息しているが、実際に現在の村でのチュクチの狩猟に関与しているのは前二者である。

ここで、ベーリング海峡におけるクジラの回遊路を紹介する。例えば、コククジラは、体長8~15m、重さ約10tに及ぶ。夏にはベーリング海に冬にはカリフォルニア沖という数千kmのあいだを回遊するといわれる。その一方で、ホッキョククジラは、体長15m重さ15tにも及ぶ。このクジラの場合、氷床の移動に大きく左右され、氷床のラインが南下する冬、北上する夏に応じて回遊は異なっている。

次にセイウチは、雄と雌の違いに加えて新生個体、1歳個体、単独個体などのように性・年齢に応じてもっと細かく分類されている。セイウチは、現在のアッカニの狩猟キャンプの先に繁殖地が知られている。最後にアザラシは、フイリアザラシ、アゴヒゲアザラシなどが生息する。このように海獣の生態は、海獣の種類によって大きく異なっている。なお、シロイルカは、地元住民によるとほかのクジラに比べて賢く、捕獲が難しいといわれる。

ロリノ村には公的企業と私的企業がクジラ狩猟に従事

しているが、以下では、村の公的企業の「ケペル」がおこなうクジラ狩猟に焦点を当てる。

3 クジラ狩猟の実態

クジラ狩猟は、狩猟の担い手である狩猟集団、実際の狩猟活動、解体と分配という3つの側面から把握することができる。

(1) 狩猟集団

まず狩猟集団は、すべて村在住の「ケペル」の男性職員のみによって構成される。メンバー全体が4つの班に分けられ、おのおのには長（バリガーシル）がいる。班ごとに狩猟をともしにする人が選ばれ、1隻のボートに同乗することになる。そして、このなかには、鉾を投げる人、銃を撃つ人、ボートを操縦する人など事前の役割分担がされている。また、海が荒れて漁に行けない日などは、集落内で可能な「ケペル」の他の仕事をするようになる。なお、ボートには村の少年が乗ることもある。

(2) 狩猟活動

まず、狩猟活動を行なうには、装備が必要である。船外機付きボートのほかに、ライフル銃、ダーティングガン (darting gun: 手持ちの捕鯨砲)、ブイ (浮き) のついた鉾などは不可欠である。また、狩猟の時期は、対象とする海獣類の生態に応じて異なっている。とりわけ、コククジラの狩猟の時期は、コククジラが海岸近くを回遊する6月から11月にかけての期間に限定される。しかし、ホッキョククジラの場合は、割り当て頭数が1頭のみということもあって、ロリノ村近くの海上から離れて、獲物を求めて遠方にまで出かけている。

さらに、実際の狩猟行動をみてみよう。狩猟の開始は、各個人ではなく国営の事業体「ケペル」の長によって決定される。「ハンター」は、毎朝、事務所のある建物の外に並び、公的企業のボスの指示を待つことになる。しかし悪天候の時には、海獣類の狩猟とは直接関係ない仕事に当てられたりすることもある。

船着場には、狩猟用の道具を保管する小屋が並んでいる (写真1)。これらは、すべて公的企業の所有である。「ハンター」は、事務所からの指示を受ければ手際よく狩



写真1 狩猟活動の拠点となる船着き場

猟の準備にとりかかる。

クジラ狩猟活動の事例を示す。2004年9月17日の11:30、2隻の船が組になり村を出発（この点は、私的企業の場合も同様である）。11:40、クジラの発見。11:59、ブイが結ばれていて獲物が海中に沈まないようにして浮きのついた、最初の銚を投げる。そして、ライフル銃で29発を撃ちつける。ここでは、首や胸などをねらう。クジラの攻撃を恐れるからである。そして、12:13、約10～15mの距離から最初のダーティングガンを撃つ。結局、ダーティングガンは4発打ち込まれる。12:27、クジラの死亡を確認する。その仕留めた場所は、村からおよそ9km（5マイル）の距離である。13:57、クジラを運んで村に到着。なお、近年、クジラが苦しまないように捕獲するような配慮がなされている。そしてクジラが浜に到着後、体長などが測定されその情報（パスポート）はチュコト自治管区の中心地であるアナーディルの事務所にファクスで送られる。

以上のような事例からは、クジラを最初に発見してからわずか47分間でクジラを死亡させていることがわかる。また、最初のダーティングガンを撃ってからわずか14分で死亡させており、クジラを苦しませずに殺しているといえるであろう。

さて、現時点では、捕獲されたクジラごとの捕獲場所を地図上にプロットすることはできないが、村の狩猟従事者の大部分は、国営の事業体（「ケペル」）に所属し、4つの集団に分かれている。それらの狩猟集団の猟場は、獲物の季節的移動に応じて変わり、一時期には村から10km以上離れた元の居住集落が狩猟キャンプ（アッカニ）として選ばれることもある。海洋での資源利用をめぐることは、4つの集団による明瞭なテリトリーはみられない。なお、2003年の場合、ホッキョククジラを対象にした猟獲の場合には、村の海を超えてかなり遠方に行くことがある。またアッカニの狩猟キャンプでは、主としてセイウチが捕獲される。

表1 ロリノ村における海獣類の月別捕獲頭数(2002年)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
セイ	0	0	0	0	0	22	0	5	79	45	152	3
アゴ	3	1	1	0	15	48	0	0	0	1	36	49
ファイ	30	41	18	4	43	54	0	0	0	8	65	125
コク	0	0	0	0	0	9	8	13	8	4	0	0
ホッ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0

注) セイ:セイウチ、アゴ:アゴヒゲアザラシ、ファイ:ファイリアザラシ、コク:コククジラ、ホッ:ホッキョククジラ

また、表1は、2002年度における海獣類の月別捕獲頭数を示す。コククジラは、6月から10月に捕獲され、8月には10頭を超えている。ホッキョククジラは11月に1頭捕獲されるのみである。セイウチは、6月と9、10、11月に捕獲されるが、11月の捕獲頭数が150頭をこえて最も大きく、1～5月の捕獲頭数はゼロである。その一方でファイリアザラシは、7、8、9月以外に捕獲され、12

表2 ロリノ村におけるコククジラ捕獲頭数の変化(2002年)

狩猟活動日	捕獲頭数	性別
6月4日	2	オス2
6月12日	2	オス、メス
6月17日	2	オス、メス
6月26日	2	メス2
6月28日	1	メス
7月2日	2	オス、メス
7月9日	1	メス
7月17日	1	オス
7月18日	4	オス2、メス2
8月1日	2	オス、メス
8月5日	2	メス2
8月8日	2	メス2
8月16日	1	オス
8月20日	2	メス2
8月23日	2	オス、メス
8月29日	2	オス、メス
9月7日	2	オス、メス
9月9日	2	オス、メス
9月16日	2	メス2
9月27日	2	オス、メス
10月2日	2	オス2
10月10日	2	オス、メス

月のそれが最も大きい。アゴヒゲアザラシは、同様に7、8、9月に加えて4月にも捕獲されない。

これらから、7月から10月にはクジラ、11月にはセイウチ、その他の月にはアザラシというような対象動物に応じて月別配分がなされ、1年間を通して狩猟がくまなく維持されていることを見出すことができる。また、その配分には、捕獲時期にロリノやアッカニなどの近くにクジラやセイウチが回遊するという海獣の生態が大きく影響していると考えられる。

その一方で、2002年のロリノ村の年間捕獲頭数は、コククジラ42頭（雄18頭、雌24頭）、ホッキョククジラ1頭を示す。この他には、セイウチ（2002年は500頭の制限頭数で306頭）やファイリアザラシやアゴヒゲアザラシが捕獲されている。表2は、2002年におけるコククジラの日別捕獲頭数の変化を示す。コククジラの場合、6月4日から10月10日までに、0～10日おきに、1～4の集団によって1日当たり1～4頭が捕獲されるが、1日あたりに2頭のコククジラを捕獲することが最も一般的に見られる。オスとメスの性比は、3対4になっている。この値は、クジラ捕獲の際には陸あげされるまで雌雄の区別がわからないことと関係していると思われる。

(3) クジラの解体と捕獲した肉の分配

筆者が、陸揚げされたクジラの解体を観察していると、毎回、同じ人びとが解体しているわけではないことがわかる（写真2）。村人が、勝手にやってきて道具を使い自由気ままにクジラの皮や肉を刻んでいく。その際

には、捕鯨の事業体になる「ケペル」のメンバーでない人びとが解体することもある。

クジラの肉は、飼育キツネの餌用がトラックの荷台、鯨油用の肉などは別の場所とか用途目的の違いに応じて仕分けられる。しかし村人は、無償でクジラの肉を受け取ることはできない。「ケペル」の職員が肉のかたまりの目方をはかり、あとからその金額を支払うことになる（写真3）。



写真2 コククジラの解体

4 村における海獣狩猟の役割

(1) 村の経済のなかでの海獣狩猟

チュクチの海獣狩猟の経営は、現在、イギリスのプロサッカーチーム・チェルシーのオーナーであるアブラモビッチ氏（池谷 2005）が知事をする、チュコト自治管区の農業局の政策によって影響を受ける。

「ケペル」の労働内容別の従事者数を示す。ロリノ村はベーリング海峡に面し、内陸部にはツンドラを含む。2004年の資料では、村人は海獣狩猟（32人）、トナカイ飼育（23人）、民芸品制作（48人）、キツネ飼育（33人）などに従事している。つまり農業労働者のための地方自治体（ムニスパル）の総従事者は175人で、そのうち海獣狩猟の従事者は32人である。なお、近年、「ケペル」は、セイウチの肉の缶詰生産を計画している。これには、NGOレッドクロス・チュコトカ支部の資金援助が大きく関与している。

(2) クジラの肉をめぐるつながり

捕獲した海獣の肉は国営の事業体に所有され、コククジラの場合には、食用、犬用、オイル用、飼育キツネの餌用などに利用されている。食用では、各「ハンター」が肉を購入すると（1キロ当たり6ルーブル：約25円）給料から差し引かれることになるが、犬用には1人当たり70キロの肉が無償で分配される。村には各群が数頭からなる約14の犬群がいて、これらの犬はそりの牽引に使われている。

表3は、チュクチのある家族が飼育する犬に関する情報を示す。この家では、オス7匹とメス2匹をあわせて9匹の犬を飼っていて、その年齢は3歳から10歳までに広がるが4、5、6歳がそれぞれ2匹づついる。また、9

匹の犬すべてに名前がついていて、ロシアの大統領と同じプーチンという名前の犬がいる一方で、ヨナサルギンというチュクチ語に由来するものも存在する。これらの犬はすべて、平素、ロープでつながれていて、自由に行動することはできない。家族のなかでは少年が、犬にクジラやセイウチなどの肉を与えるなど世話をしている（写真4）。8～9月には、リヤカーのようなものを犬たちが引いたりするが、冬には犬ぞりとしてアザラシ猟などに使われる。



写真3 集落内でのクジラの肉の販売
かごの中の肉が売られる。



写真4 犬にクジラの肉を与える

表3 あるチュクチの家族の犬

	犬の名前	性別	年齢
1	Putin	M	3
2	Sera	F	6
3	Marshall	M	4
4	Bethy	F	7
5	Orshin	M	10
6	Selieh	M	6
7	Milkupek	M	5
8	Kuzia	M	5
9	Ynnansal'gin	M	4

(3) 固有の知識の継承：クジラとセイウチ

クジラとセイウチのチュクチ語での語彙を比較してみると、セイウチには性や年齢による呼び名があるが、クジラにはそれが発達していない。クジラ、コククジラ iitiv、ホッキョククジラ ravであるが、セイウチ ryrki、オス katvae、メス navryrki、1歳 penval、新生個体 kesyki、単独個体 keqlus と分かれている。

なお、2005年8月には国が異なるが同じコククジラを捕獲してきた先住民同士の新たな動きがみられた。アメリカのシアトル近郊に暮らすマカインディアン(Makah Indians)の一行が、はじめてチュクチの村ロリノを訪れた。マカは、チュクチと同じコククジラの狩猟を行っていたのであるが、最近までその狩猟が衰退していたために、ロリノ村にてチュクチからクジラの狩猟方法を教わったのである。

5 村における2つの事業体：公的企業と私的企業

(1) クジラ捕獲頭数の割り当ての変化

まず、その年の企業体別のクジラ割り当て数は、その年の1月の会議できめられる。表4は、ロリノ村における割り当て頭数の年変化を示している。まず、公的企業「ケベル」のほうの変化をみてみよう。1998年から2001年までは、70-75頭でほぼ安定しているのに対して、2002年には48頭に大幅に減少している。この原因は、これまでクジラ狩猟をしてこなかった村で狩猟を始めたためと説明されている。その後、2003年には35頭、2004年には32頭にさらに減少したのちに、2005年には40頭に増加している。なお、2003年、2004年の減少は、割り当て数をめぐって私的企業とのコンフリクトを生み出している。

表4 ロリノ村におけるクジラ捕獲制限頭数・捕獲頭数

	公的企業*	私的企業	公的企業**
1998年	75(72)		1(0)
1999	70(63)		1(1)
2000	73(62)		3(1)
2001	71(66)		1(1)
2002	48(48)		1(1)
2003	35	12(4)	1
2004	32	10(7)	1
2005	40	8	1

注) *コククジラ、**ホッキョククジラ、()は捕獲頭数を示す。

その一方で、私的企業「アッカニ」は、捕獲頭数では2003年に4頭で始まり、2004年には7頭に増加したものの、捕獲制限頭数では2005年には8頭に減少している。この減少は、2004年に7頭しか捕獲できなかったことによるであろう。この原因を、代表者は燃料不足であると説明している。また、2005年9月下旬に私的企業のほうはさまざまな理由で捕獲頭数はゼロであった。政府との同意ができていないためである。

(2) 私営企業「アッカニ」の新たな動き

新しい組織である私営企業「アッカニ」には、数人のメンバーがいる。代表者の家族に数人の男性が加わる程度である。代表者の男性は、もともとは公的企業に従事しておりバリガージルをつとめた経験を持つ。現在では、チュクチ伝統的の海獣狩猟連合(Association of Chukchi Traditional Seamanmal Hunters)の代表でもある。これまで数多くの国際捕鯨委員会(IWC)の会議に参加している。筆者は、2002年5月に下関会議の際に彼に会っている。当時、チュクチの「ハンター」の参加者は2名のみ(エグベキノットとロリノ村居住者の彼)であった。

ここで、2004年における新たな組織の経営では、村人からお金を集めて肉を無料で提供するというシステムをつくっていた。その対象になる村人の総数は340人であり、1人当たり100ルーブル：約400円(年金受容者は50ルーブル：約200円)を支払うことで年間のクジラ肉をもらうことができた。彼は、そのお金を燃料代に当てていた。ちなみに、1頭のクジラを捕獲するには200リットルのガソリン・燃料費がかかる。1リットル当たり14ルーブルかかることから、1頭の捕獲には2800ルーブル(約11200円)かかることになる。これは、約100ドルに相当する。しかし2005年においては、村人からの集金を行なっていなかった。

その一方で、村における2つの事業体の関係は微妙である。親族のなかに2つの事業体に分かれた人びともみられる。

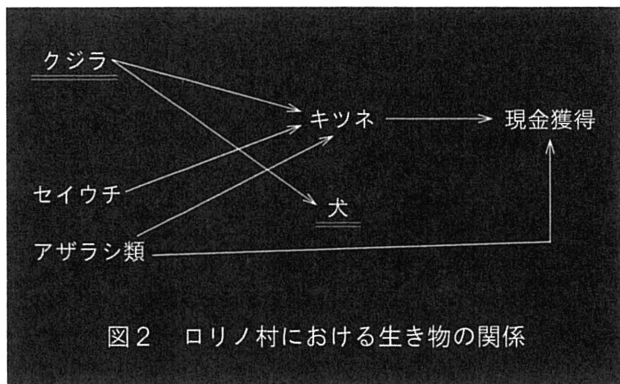
6 まとめと考察：グローバル化とチュクチの海獣狩猟の新たな時代

本研究では、海獣類のなかでクジラを中心にすえて、現代のチュクチの海獣狩猟の実態を詳細に記述し、集落における海獣狩猟の社会経済的役割について考察することを目的とした。具体的には、第一に、チュコトカの海獣狩猟の全体を概観し、第二に、調査村におけるクジラ狩猟の実態を詳細に記述し、最後に村におけるクジラ狩猟の意義や国営と私営という2つの事業体の役割を考察した。その結果、以下のような3点が明らかになった。

1) チュコトカは、ロシアにおいて最も海獣狩猟が盛んな地域のひとつである。クジラのほかセイウチやアザラシなどを対象にして捕獲してきた。なかでもコククジラの捕獲頭数は、チュコトカのなかで本稿の調査地であるロリノ村が最も大きい。

2) 調査地であるロリノ村のクジラ狩猟は、コククジラの回遊にあわせて6月から11月まで行われている。彼らはコククジラ、ホッキョククジラ、セイウチ、アザラシなど様々な海獣を狩猟してきた。彼らには村から離れたところに狩猟キャンプがある。しかし、チュクチの「ハンター」は、狩猟を望むときに狩猟に出かけることのできる狩猟採集民のハンターと実態は大きく異なっている。

3) 村におけるクジラ狩猟の意義を把握するために、図2では、ロリノ村におけるクジラ、セイウチ、アザラシ



類などと犬やキツネとの関係を示した。この図から、クジラの肉は、そのものから直接に現金獲得が禁止されているので、犬やキツネに与えることで間接的に利用して付加価値をつける方法がなされることがわかる。また、村内には2つの事業体が共存しており、両者の動向は注目される。さらにチュクチは、回遊する海獣類を対象にして自然と対峙していると同時に、肉利用をとおして多数の犬を確保してきた。この犬は、犬ぞりに利用される。これらは、彼らのアイデンティティを強く維持するうえで、大きな役割を果たしていると思われる。近年、国際捕鯨委員会によるこの地域の割り当て頭数の削減、および村の内では新たな狩猟集団が形成されるなど海獣狩をとりまく環境は変化しており、今後の動向が注目される。

以上のように、現在のチュクチの海獣狩猟は、NGO レッドクロス役割、アメリカインディアンとの交流など、外部との関係なしでは把握することはできない。これは、これまでのチュクチの歴史にはまったくみられな

かった新たな時代になったといえるであろう。

最後に、本報告の結果から現在の海獣狩猟はどのように変遷したのかを考えたい。現時点では、筆者は、村の経済を次の3つの時代に分けて考えている。

第1は、「海獣狩猟文化複合」の時代である。1900年ごろのチュコト半島の集団は、プレ社会主義の時代であり、ここには80-100のキャンプがあるが、気候の厳しさや放牧地の不足からトナカイ群は大きくないという。このキャンプの半分は、海洋からの食糧を入手し、イヌチームや毛皮のボートを所有する(池谷 2002:291)。これは、ボゴラスの民族誌にみられる記述であるが、具体的にどのような生活イメージであるのか、あいまのまま残される。ただ、この時期に中心となる海獣はセイウチであると考えられる。

第2は、「海獣狩猟国営」の時代である。1950年頃から対象地域に社会主義体制の政策が浸透して、1970年代には集落の強制移住が行なわれると同時に、海獣狩猟とトナカイ飼育などの新たな経済の再編成がなされた。そして第3は、本稿で紹介した「公的企業と私的企業の共存」の時代である。

なお、本報告の成果は、かつての狩猟採集民チュクチの海獣狩猟の変容した形を示しているのであろうか？チュクチのクジラ狩猟と日本の近世におけるそれとの比較研究が意味をもつものと考えている。日本の近世の狩猟は、銚と建網追いこみなど「農耕社会におけるクジラ狩猟」の特徴をよく示しており、藩政と資本家との関係も無視することはできない。当時、日本では水田の害虫を殺すために使われたという鯨油利用についても、チュコトカのそれとは大きく異なり注目される。

参考文献

- Kerttula, A. M.
2000 *Antler on the Sea*. Ithaca: Cornell University Press.
- 秋道智彌
1994 『クジラとヒトの民族誌』東京：東京大学出版会
- 浜口 尚
2003 「北極圏地域における先住民存続生存捕鯨—アラスカとチュコトカの事例より—」『第17回北方民族文化シンポジウム報告』27-32. (財)北方文化振興協会
- 池谷和信
2002 「シベリア北東部におけるチュクチの文化変容」煎本孝編『東北アジアの文化変動』：283-317. 札幌：北海道大学図書刊行会
2003 「ベーリング海峡におけるチュクチの海獣狩猟について」『生き物文化誌学会・第1回学術大会予稿集』20頁
2004 「チュコトカ半島の調査」『第19回北方圏国際シンポジウム オホーツク海と流水』
2005 「ロシアの石油王に託された先住民の未来」『月刊みんぱく』29(1)：14
- Ikeya, K.
2005 Socioeconomic relationships between herders and hunters: A comparison of the Kalahari desert and northeastern Siberia, *Senri Ethnological Studies* 69:31-44.
- Ikeya, K. (ed.)
2003 Reindeer Pastoralism among the Chukchi. *Chukotka Studies No. 1*.
- 岸上伸啓
2002 「カナダ極北地域における海洋資源をめぐる紛争—ヌナビック地域のシロイルカ資源を中心に—」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海』：295-314. 京都：人文書院
- 大隅清治
2002 「チュコトカの捕鯨」『鯨研通信』416
- 大曲佳世
2002 「政治的資源としての鯨」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海』：231-255. 京都：人文書院